

## 童話風『長靴をはいたナオちゃん』

二十七回生 萩原 直大

昔、定年後は童話を書きたい と思ったことがあります。でも、現実はその状況になってみると、童話っていかに難しいか、詩的感性を持つていないととても書けるものではない と悟りました。

そして、黒澤琉美子様の『モッコちゃんのコーヒー店』を読み、感激すると同時に、ご本人は黒澤あぐりという詩人であることも知りました。

仕方がないので、私の幼かったころの思い出を童話風に書いてみました。四歳（昭和二十二年）から九歳（昭和二十七年）くらいまでのことです。

戦争が終わって、二年が経ちました。「ビーコーこわい。ビーコーこわい」と言っていたナオちゃんも、もう4歳です。ビーコーとはB29米軍爆撃機のことです。

ナオちゃんは長靴が大好きで、お天気が続き水たまりなんて一つもないのに、いつも長靴をはいていました。だから、ナオちゃんのことを、近所の人は「長靴小僧」と呼んでいました。

近所ではナオちゃんを、本当は「ナオボン」と呼んでいたのです。ナオちゃんには七歳、五歳、三歳上のオネエちゃんがおり、末っ子だったから「ボン」とくっつけたのでしょうか。

色白で太っていたので、「白ブタ」とか「ダルマ十三」とも呼ばれていました。なぜ「十三」が付いているのか解りませんが、きつと千里山西十三丁目だったからでしょうか？

今日も長靴をはいて、お外で遊んでいると、そろそろ千里山中学の学生が帰ってきました。

ナオちゃんのオウチは、下の噴水から千里山公民館の前を通り過ぎ、5軒目の右角の家でした。

千里山中学がほんの一年間ほど千里山高校になり、やがて吹田第一中学になりましたが、そうになると、もうあまり学生は通らなくなりました。

きつと千里山中学・高校は私立で電車通学の学生が多く、ナオちゃんのオウチは千里山駅と学校の通学路の途中だったからだと思います。でも消防署の前を通って上の噴水までの道もあったのに。

千里山は坂が多く、三輪車遊びをしていたナオちゃんには大変でした。これは、もう少し大きくなって、自転車に乗れるようになっても同じでした。お陰で足が強くなったかも知れませんが。

もっとも三輪車遊びの頃は、下りは三輪車に乗って、上りはオネエちゃんに押ししてもらったりして楽チン、楽チンでした。だって3人もオネエちゃんがいたのですから。

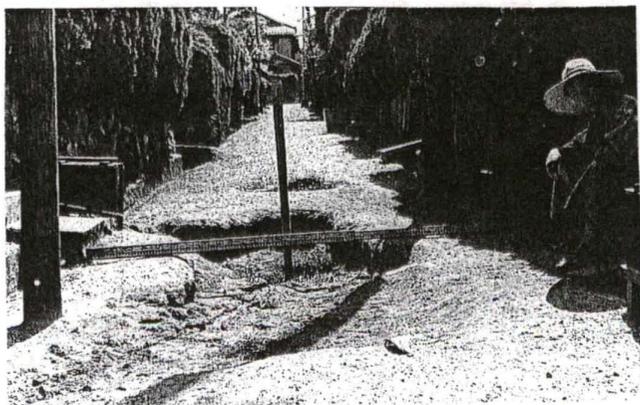
もう一つ、坂道で困ったのは、ナオちゃんがもう少し大きくなってボール遊びをするようになってからです。ボールを取り損ねると、どんどん下に転がるからです。

でも、坂道のお陰で、側溝に水を流して、それを途中で泥のダムを造り堰き止めて遊びました。水の代わりにオシッコを流したこともあり、将来土木屋に成る要素があったのででしょうか？

千里山の道って実によく陥没したものです。下水管が脆くなっていたのでしよう。下水管の周りは山砂で埋め戻されていましたから、ナオちゃんにとっては、恰好のお砂場でした。

時折、ウシやウマに曳かれた荷車が通るぐらいで、自動車なんて滅多に通らないので、陥没した穴は放ったらかしでした。

「ウマなんて居た？」と思う人もいるでしょうが、モコモコした栗饅頭のようなウマのウンコを時折見ました。今になって思うと、関大の馬術部のウマかな？あの頃は時折、通っていましたが。



ウシが曳く荷車は、農作物の運搬用もあるでしょうが、多くは肥の汲み取りでした。

当時の千里山の便所はどこもポットン便所でしたから。でも何故か、便所の脇には南天の木が植わっていましたが、あれって千里山だけ？それともナオちゃんのオウチの周りだけ？

そういえば、幼稚園に上がるかどうかのころ、ナオちゃんは一度、この肥運搬用のウシが電柱に縛られていたのをいいことに、草の束でウシの鼻をコチヨコチヨとくすぐりました。途端にウシは怒りだし、頭突き一発でナオちゃんを空中にホリ上げましたが、上手い具合に西脇さんの垣根を越えて、庭にドサッと落ちました。こんな時って、案外けがはしないものです。

車の通らない当時の道は、子どもたちの最高の遊び場でしたが、よそのウチの庭も、また最高の遊び場でした。いや、庭そのもので遊ぶのではなく、背中合わせの家の生垣を通過して次々と移動するのです。

なにしろ缶ケリや探偵ごっこ、かくれんぼ、戦争ごっこでは鬼から逃げなければならぬのですから。その頃のナオちゃんの近所では、生垣はほとんどが貝塚の木でした。

向い合う5軒同士とナオちゃんのオウチ側で背中合わせの5軒、この15軒が一かたまりで、たいがい子供は4〜5人が普通でした。子供のいないオウチもありましたが、ナオちゃんはその中でも下の方でした。千里山でも古くからの地区は、だいたいそうで、幼稚園や小学校へ行くようになって、友だ

ちはたいがい末っ子でした。それでも小学校で生徒が増え続けたのは、どんどん周辺が開けていったからです。駅と学校の間の公団アパートが出来た少し前から、分校周辺や郊外学園、永楽園や一中の東側周辺、花壇町の奥の公務員アパート等が開発されて行き、そこに次々人が集まりました。

近所ではナオちゃんより下には、西脇さんのケンちゃんや畑さんのプッチちゃんという女の子ぐらい。プッチちゃんはナオちゃんが大好きで、いつも「ナヒロちゃん ナヒロちゃん」とナオちゃんの後を追っかけていました。でも、プッチちゃんが五、六歳の時、病気で亡くなってしまったのです。

棺桶を家族で担ぎ、その後を近所の人と一緒に佐井寺の火葬場まで運びました。

ナオちゃんは間違いなく、天国のプッチちゃんの初恋の人です。

当時の食べ物は今から思いだしても、実にお粗末なものでしたが、ナオちゃんは幼かった分まだ食べざかりではなく、ヒモジイ思いはオネエちゃん達より、少なかったでしょう。それともう一つ、戦時中の生まれだから、おいしいものを食べたことがなく、知らないのです。これは幸せでした。

でも、ごはんよりイモの方が多いお雑炊。それもツルの方が多く、パンもウドンも配給で、「クーポン券」という言葉はこの時に覚えました。

ナオちゃんのお父さんの実家は百姓のくせに、お父さんは実に野菜作りが下手で、最初、ジャガイモを庭に植えた時には、ほとんど肥料を撒かなかったので、実の小さなイモしか出来ず、次に育てたサツマイモでは、今度は必要以上に肥料をやり、実よりツルの方が育ち過ぎた とよくお母さんがグチをこぼしていました。

そのころ、どこのオウチでも動物を飼っていました。西脇さんの所ではウサギ、岡田さんの所ではアヒル。ナオちゃんのオウチでもニワトリを飼いました。これどときどきあのおいしいタマゴが食べられると思うと・・・。

ところがこれまたお父さんの失敗。2、3日でニワトリはイタチかネコに食べられてしまいました。それも2回も それでお父さんはあきらめてしまいました。肉食獣対策が不十分だったのです。

また、ときどき下の噴水にトラックでサツマイモが運ばれてきて、皆で貰いに行きました。西脇さんのツネちゃんから「同じ個数なのだから大きいのを選ぶのよ」と教えられました。しかもそのサツマイモを手押し車に乗っけ、坂道を皆で押して帰ったものです。ナオちゃんがどれほど役に立ったかはわかりませんが。

西脇さんにはナオちゃんの一つ上にマーちゃん、五つ上にノブちゃんというオニイちゃんがいきました。お父さんは商業学校の先生をされていましたが、ナオちゃんのお父さんに比べるとずっと野菜作りは上手で、自宅の庭はもちろん、牛が首池の方にも



土地を借り、作っておられました。マーちゃんと一緒にお手伝いをし、抜いたばかりのダイコンやニンジンそばの川で洗って、そのまま丸かじりしたものです。でも、マーちゃんと違い、ナオちゃんはニンジンが嫌いだったのでかじれませんでした。

もう少し大きくなってからは、ハチの巣を見つけては、新聞紙を丸めて火を付けそれで焼き、ハチの子を一つずつ引つ張り出して食べたものです。甘くて甘くて・・・でも何故か、ナオちゃんはハチに刺された記憶がありません。

5歳ぐらいからナオちゃんは、将来、日本テレマン協会を創った延原武春ちゃんと大の仲良しになったのですが、山にもよく一緒に行きました。ところが、タケハルちゃんはウルシにもものすごく弱いのです。ウルシの木のそばを通っただけで二・三日間幼稚園や学校を休むほどでした。ハチに強かったナオちゃんはウルシにも強かったのです。



配給と言えば、ナオちゃんのお母さんの方のおジイちゃんは、時々東京からやってくる一ヶ月ほど泊まっていきました。面白いおジイちゃん、その頃は70歳代でした。配給のタバコの葉と紙でタバコ巻機を使って、自分で捲くのですが、ナオちゃんがお手伝いしました。目が悪かったからです。

捲き終わると、その紙の端を舌の先で滑らせ、唾を糊替りにしていました。

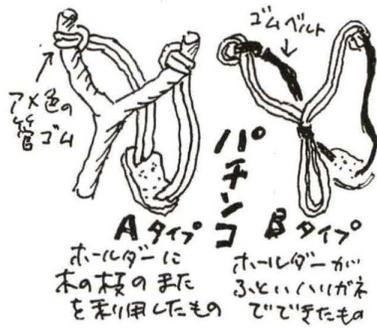
さらに、おジイちゃんは新聞紙を何度も折ったあと、肥後の守で切り裂き、小さくなった一枚、一枚をナオちゃんに丸めて広げてと繰り返し、トイレット・ペーパーを作っていました。新聞紙のままではオシリが痛いからでしょう。

このおジイちゃんはナオちゃんが小学校4年生のときぐらいまで時々やってきました。何故か関大に連れて行ってくれと頼まれ、よく一緒に行きました。広島や長崎の原爆展を最初に見たのも、関大の大学祭の催しの一つだったと思います。

大学祭最後の催し、例の土人の踊りは今でも鮮明に覚えています。

その他、グライダーの練習など、大勢の学生がゴムのロープを人力で引っ張り、これ以上は無理、との合図で放すのですが。まるでパチンコです。

ナオちゃんが小学校に上がる直前まで、関大と隣り合った「遊園地」は開かれており、飛行塔、動物園、長い、長いコンクリートで出来た滑り台もありました。おジイちゃんと一緒にこの遊園地にも行き、サルの檻に近付き過ぎたナオちゃんは、サルに引っかかれてお泣きに泣き、おジイちゃんはオウチに帰った後、お母さんつまりおジイちゃんの娘から、散々に叱られて



いました。

目が悪かったので、それ以外ではあまり外に出ず、よくラジオを聞いていました。好みは落語と広澤虎三の浪曲です。「食いねく食いねく寿司食いねく 神田の生まれだつてね」

例の『森の石松』です。「例の っって何が例の なの？ 森の石松つて誰のこと？」と若い人に反論されそうですが。 ナオちゃんはすっかり覚えてしまいました。

その他、おじいちゃんはラジオを付けっぱなしにしていたので、舞鶴への『引揚者』の名前の読み上げや、『北浜・証券取引所』の株価の読み上げが流れていたものです。意味はよく解らないものの

長靴ばかりはいていたナオちゃんも、そのうちに下駄に変わり、幼稚園から大学に至るまで、夏場はもっぱら下駄ばかりをはいていました。それは、その頃未だ、千里山の道はアスファルト舗装をされていなかったと言うことです。

千里山が、完全に水洗便所、アスファルト舗装になったのは、万博の直前ではないでしょうか？

ナオちゃんも、今はすっかり先のおじいちゃんと同じぐらいの年に成り、孫と一緒に暮らしています。

「ジージ 飲み過ぎないで」と言われながら。

おわり